

アキール文庫コレクション——ペルシア語詩人伝を中心に——*

近藤 信彰**

Persian Biographies of Poets in the Aqeel Collection

KONDO Nobuaki

In recent years, Persian culture outside Iran has attracted more and more researchers. In this regard, the most important region was South Asia, which is said to have produced an even greater quantity of Persian writings than Iran. South Asian literati loved Persian literature and competed for the patronage of kings' and governors' courts. The *tazkirahs*, Persian biographies of poets, consisting of short biographies and pieces of their poetry, well reflected their activities in Indian sub-continent. This article is a short introduction to *tazkirahs* preserved in the 'Aqeel Collection, Kyoto University, most of which are rarely found in other libraries in Japan.

近年、イラン以外の地域でのペルシア語文化に関する関心が高まっている。そのなかでも、南アジアでは、イランを凌ぐ量のペルシア語文献が著されたといわれ、その存在感は際立っている。ペルシア語文学、特に韻文は、南アジアの人々に好まれ、宮廷ではペルシア語詩人がその技を競った。この詩人達の略伝と作品の抜粋からなるのが、詩人伝である。南アジアにおいては、イランを凌ぐ数のペルシア語詩人伝が19世紀まで書き継がれた。一方、18世紀以降、レーフタ (*rīkhtah*, 原義はペルシア語で「砕かれたもの」と呼ばれるウルドゥー語詩が流行すると、略伝の部分はペルシア語で、レーフタの作品を収めたレーフタ詩人伝が多く著された。これらの詩人伝は、文学史のみならず、当時のペルシア語・ウルドゥー語文化のあり方や言語使用の状況を示す史料として、きわめて重要である。

最近ではイランでも多くの南アジアの詩人伝が刊行されているが、インドやパキスタンでも、長い時間をかけてさまざまな作品が出版されてきた。しかし、これら亜大陸出版の作品は我が国では入手困難なものが少なくなかった。このため、筆者も欧米やイランの図書館で、機会を見つけては複写をすることで、どうにか研究を続けてきた。京大アキール文庫は、アキール先生の文学への深い造詣を反映して、こうした文献がこれまで訪れたどの図書館より揃っている。安くはないコピー代を払いながら、コピー機でくたくたになって複写を取ってきた筆者の苦勞は何だったのか、と思ってしまうほどである。ここでは、そのなかで、比較的入手の難しいもの、日本の他の図書館に収められていないものを中心に紹介したい。

1. Qāṭi'ī Haravī. *Tazkirah-'i Majma' al-Shu'arā-yi Jahāngīr Shāhī*. ed. Muḥammad Salīm Akhtar. Karachi Institute of Central and West Asian Studies. 1979. (AQEEL||B||603||1)

著者カーティイー(1615年没)はホラーサーン地方のヘラート(現在はアフガニスタン)の出身であるが、栄達を求めてインドへ移住、アグラに住み、第2代フマーユーン以降のムガル朝皇帝に

* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」(課題番号24320017)の研究成果の一部である。

** 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

仕えた。写本作成の技術にも優れていたという。

本書は、第4代ジャハーンギール(位1605~27)の名を冠した、150名あまりの詩人を取り上げた詩人伝である。同時代人の詩人も多いが、それ以前の者たちも含まれている。他の詩人伝にない特徴としては、一人の詩人の小伝を、ジャハーンギールを賞賛する言葉で締めくくることがある。たとえば、イランのアスタラーバード出身のモッラー・ファフミーの場合はこうである。「神よ。賢き(‘ālī-fahm)詩人たちの詩が、時のページに記録されている限り、公正で聖騎士たる王、ヌール=アッディーン・ムハンマド・ジャハーンギール陛下の命と幸運がありますように」[92]。一人一人、詩人の名などに合わせて表現を変えている点が心憎い。先行する作品としては、ダウラトシャー・サマルカンドの『詩人列伝』と、カーミー Kāmī の『偉業の珠寶』*Nafā'is al-Ma'āsir* を主に参考としている。

2. Shīr ‘Alī Khān Lūdī, *Mir’āt al-Khayāl*. ed. Ḥamīd Ḥasanī. Tehran: Rūzanah. 1998–9. (AQEEL||B||608||18)

1690–1年成立。著者はアフガン系のローディー族の出身で、ベンガル地方で育った。古の詩人たちと近年の詩人達の双方を取り上げた詩人伝である。近年の詩人達とはこの場合、シャー・ジャハーン(位1628~58)以降の詩人達を指す。古の詩人達は、ダウラトシャーの詩人伝に基づくルーダキーからアーサフィーまでの59名と著者の追補の8名であり、で、そのあとが近年の詩人達で、故人26名、存命の者21名が取り上げられ、さらに女流詩人15名が時代を問わずに紹介される。これらの詩人の列伝の間に、詩の韻律や解釈、音楽、夢占い、酒、医学、倫理学などに関する小論が挟み込まれているのが特徴である。

3. Sirāj al-Dīn ‘Alī Khān Ārzū. *Tazkirah-i Majma’ al-Nafāyis*. 3vols. Islamabad: Iran Pakistan Institute of Persian Studies. 2004. (AQEEL||B||606||27–29)

著者アールズーはアウラグの南100kmほどのグワーリヤルに1099/1687–8年に生まれた。父はムガル朝アウラングゼーブに仕える軍人であった。14歳までにペルシア語やアラビア語を学び、その後アウラングゼーブに仕え、デカン遠征に同行した。アウラングゼーブ没後の政治的混乱に翻弄されながら、さまざまな主君に仕えつつ、作詩と執筆に勤しみ、1169/1756年にラクナウで没した。極めて多作な人物で、詩集のほか、サアディーの『薔薇園』の注釈や作詩用のペルシア語辞典など36の著作がある。

本書が成立したのは1164/1750–1年である。序文のなかで、著者は以下のように語る。友人が「いくら本を読んでも忘れてしまったのは同じことである」と叱責し、数日後に厚い冊子を持ってきて、「巨匠たちの詩のうちから選んだものをすべてこの中に書き留めなさい」と言った。100の詩集を参照して、詩を選び始めたところ、これらの作者たちについても書き留めてもいいのではないかと、という考えに至った。そこで、アウハディーやナスラーバーディー、『詩人たちの言葉』や『サームの贈物』をも参照して、気に入った者たちを書き留め、『珠寶の会』と名付けた。過去の詩人伝を参照しているものの、一方で個人の趣味・嗜好が強く出ていることを窺わせる。

刊本としては、同時代の詩人を抜き出した要約版があったが、アキール文庫に収められているのはイスラマバードで出版された完本である。時代を問わず、総計1750名の詩人の伝記をアルファベット順に収めている。

4. Afzal Beg Qāqshāl, *Tuḥfat al-Shu'arā*. ed. Ḥafīz Qatīl. Hyderabad, India: 1961. (AQEEL||B||604||25)

1165/1751-2年成立。著者はデカン高原のアウラングアバードの出身で、ハイダラーバードのニザーム政権(1724~1948)に仕えた。前書きでは、アウフィーやダウラトシャーなど多くの詩人伝の名前を挙げ、これらに記されていない当代のニザーム政権のもとにいた詩人を取り上げると述べる。特に章立てではなく、最初は神秘主義者(darvish)から始まるが、そのあとはニザーム政権君主が来て、臣下へ降りていくという順番である。取り上げている詩人は63名で必ずしも多くはない。それでも、イランや中央アジアの移住者の子孫もかなり含まれている。ペルシア語のみならず、しばしばウルドゥー語の詩も取り上げられているのも特徴的である。

5. Sayyid 'Abd al-Wahhāb Iftikār Bukhārī Dawlat-ābādī. *Taḥkirah-'i Bīnāzīr*. ed. Umīd Surūrī. Tehran: Kitābkhānah-'i Majlis-i Shawrā-yi Islāmī. 2011. (AQEEL||B||605||5)

著者はアフマドナガルで生まれ、イスラーム法学や神学などを学んだが、結婚を機にダウラトアバードに移った。文学の師はĀzād Bilgrāmīであった。その後、人生のほとんどをニザーム政権のある軍人のもとで過ごし、1776-7年までは存命であったという。

本書は1758-9年に完成した。同時代、すなわち、1688-9年以降の135名の詩人を雅号のアルファベット順に配列している。前述のカークシャルの作品同様、デカンとの関わりが深い。取り上げられている詩人には、イランからの移住者とその子孫が目につく。

6. Mīr 'Alī Shīr Qānī' Tattavī. *Taḥkirah-'i Maqālāt al-Shu'arā*. ed. Sayyid Ḥusām al-Dīn Rāshidī. Karachi: Sindhi Adabi Board. 1957. (AQEEL||B||601||5)

著者カーニウはインド・シンド地方のタッタに1140/1727-8年に生まれた。彼の先祖は、シーラーズから1520年代にこの地に移住してきて、子孫は代々、文人・学者であった。彼自身もウラマーとしての教育を受ける傍ら、ペルシア語詩に造詣を深め、8000対句からなる詩集を著したという。その後、シンド地方の総督に仕え、歴史書の編纂を命じられるが、これを途中で辞し、故郷に戻って、執筆活動に専念した。1203/1788-9年に亡くなるまで、40点以上の作品を残すという多作な人物であった。なかでも、1181/1765-6年に著したシンド地方の歴史である『貴人たちの贈物』(*Tuḥfat al-Kirām*)は有名である。

著者は、序文のなかで、サルホシュの『詩人たちの言葉』やアーザードの『白き手』(*Yad-i Bayzā*)を愛読していたと述べる。そして、シンドは優れた詩人を輩出しているにもかかわらず、それをまとめた詩人伝が存在しないことを嘆く。そこで、さまざまな文献に散見するシンドの詩人たちの伝記と作品をまとめるべく、1169/1755-6年から本書の執筆に取りかかり、1174/1760-1年に完成した。詩人の配列はアルファベット順であり、15世紀以降のシンドの詩人を中心に総計719人が取り上げられている。一方で、ムガル朝君主アクバルのような人物も含まれている。

7. Shaykh Qiyām al-Dīn Ḥayrat Akbar-ābādī, *Maqālāt al-Shu'arā*. ed. Niṣār Aḥmad Fārūqī. Delhi: 'Ilmī-majlis. 1968. (AQEEL||B||603||26)

1173/1759-60年成立。アングラ出身の著者は序文で、Vālihの*Riyāz al-Shu'arā*と'Arzūの*Majma' al-Nafāyis*に言及し、これらの著作がペルシア語詩の誕生から当代までを対象としているので、より新しいアウラングズィーブ期(1658~1707)からシャー・アラム2世期(1759~1806)までの詩人達を扱うとする。主に北インドの詩人159名を紹介している。配列は、アールズーから始まる雅号

のアルファベット順である。

8. Lachhmī Narāyan Shafīq. *Shām-i Gharībān*. ed. Muḥammad Akbar al-Dīn Sadīqī. Karachi: Anjuman-i Taraqqī-i Urdū. 1977. (AQEEL||B||606||13)

著者はデカンのダウラトアーバードの出身であり、ニザーム政権に仕えた。著作としては、まず1175/1761-2年に *Chamanistān-i Shu'arā* というウルドゥー語詩人の詩人伝を著した。さらに、1182/1768-9年に *Gul-i Ra'nā* というインドのペルシア語詩人を取り上げた詩人伝を著したが、これに満足せず、今度は別の地域からインドを訪れた詩人達の詩人伝として本書を1197/1782-3年に著し、ニザーム政権君主に献じた。刊本の副題に「イランからインドへ来たペルシア語詩人の伝記集」とあるが、アルファベット順の最初が旧約聖書のアダムで、3番目がマールワラー＝アンナフル出身者であることでもわかるように、必ずしもイラン出身者のみが含まれているわけではない。

9. Shaykh Aḥmad 'Alī Khān Sandīlavī. *Makhzan al-Ghara'ib*. ed. Muḥammad Bāqir. Vol. 1-3. Lahore. Punjab University. (AQEEL||B||602||18-20). Vol. 3-5. Islamabad: Iran Pakistan Institute of Persian Studies. 1992. (AQEEL||B||602||21-23)

著者は1750年頃、ラクナウ近くのサンディーラで生まれた、職を求めてさまよったのち、デリーの高官 Najaf Khān に仕えることに成功した。Najaf Khān が亡くなったのち、当時来たインドに移り住んでいたイラン系の人々の間を回って、ペルシア語詩を学んだ。

本書は、著者が師の勧めで1218/1803-4年に完成させた3148名を収めた大部の詩人伝である。古の詩人と同時代の詩人の双方を含んでおり、配列はアルファベット順である。しばしば、伝記部分が簡略に過ぎたり、誤りを含んでいる場合もあるが、インドで著された最後の大部の詩人伝であり、また、刊本も稀覯本となっている。ラホールから第3巻まで出版されたのち、イスラマバードで第3巻から出版されたため、第3巻の 'Ayn から Zā の部分は、両方の版に含まれている。

10. 'Ināyat-allāh Khān Rāsikh. *Risālah-'i Mughanniyān-i Hindūstān-i Bihisht-nishān*. Patna: Idārah-'i Taḥqīqāt-i 'Arabī va Fārsī-i Bihār. 1961. (AQEEL||B||603||27)

著者ラースィフは、1114/1702-3年にパーニーパッドで生まれた。彼の先祖は、13世紀にヘラートから移住した教友の末裔であった。他にペルシア語詩の撰集や書簡集などの著作がある。

本書はペルシア語圏では珍しい歌手の伝記集である。著者は歌唱をインド的伝統として認めており、全部で16名の歌手を扱った比較的短いものである。何人かの伝記は年代記 *Shāh Jahān Nāmāh* やグジャラート地方史 *Mir 'āt-i Iskandarī* の記述を元にしてしている。